

せなかむし

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第三十号（一日発行）
平成四年三月一日

「場所請負制度」の廃止

近藤芳一

蔵々代価書上

建物	数	広さ	坪数	金額
運上家	一軒	一三間×四間半	五四坪	三七〇兩
文庫蔵	一軒	五間×四間	二〇坪	一三八〇貫文
〃	〃	二間×八間	一六坪	二四〇貫文
二八蔵	一軒	八間×八間	六四坪	二五六〇貫文
〃	〃	二間×八間	一六坪	一五貫文
二八蔵	一軒	八間×八間	六四坪	二五六〇貫文
〃	〃	四尺×五尺	二四〇貫文	二四〇貫文
本蔵	一軒	四間×五間	二〇坪	二〇〇〇貫文
〃	〃	五尺×六尺	二〇坪	五〇貫文
鮭切蔵	一軒	四間×七間	二八坪	一一二〇貫文

運上家と蔵々五軒を開拓使が
買い上げた代価は、七一四兩永
三文である。その他道具一切買
い上げているので、全体の金額
は九一五兩になる。同時に、従
来「支配人、番人であった者は

官において使用する。」という
ことから、種田氏名義で、継続
して本陣（運上家）で従来通り
の業務をしていたのではないだ
ろうか。ここに次のような文書

乍恐以書付奉願上候
今般御本陣御住被仰付候ニ付当郡御収税高之内歩方頂戴可
奉願上旨仰渡候随而恐多奉存候共、御収税高之内三分ヲ以テ
御住被付被置下度乍恐此以書付奉願上候
明治四年未二月

願人 古平郡メメタレ出稼
種田徳之丞代永住

広谷 新三郎

百姓代 佐々木丑五郎 印

組頭 依田有左衛門 印

御開拓使御出張所

御書之通願出ニ御座候間依之奥書印形書上 以上

名主 瀬川吉左衛門 印

税収の三分を以て、従来通り
の運上家の仕事を継続すること
の内容と見ることが出来る。同
時に書かれた文書では、「御用
状、御用物、通行継立てについ
て遅滞なく取り扱う」というこ
とが主な仕事である。
なお、明治三年四月から十二
月までの「通行継立人足調」に
よると、次の通りである。
余市へ継立人足 二七五人
美国へ継立人足 一五三人
合計 四二八人
但し山道故馬は不相用候事
これは役人（旅行者）のため
に本陣で雇った人夫の延べ数で

今月の日出と日没

	日出	日没
3 / 1	06:14	17:24
1 0	05:57	17:35
2 0	05:41	17:47
3 0	05:23	17:59
北緯	43° 15'	45"
東経	40° 38'	35"

「退却して生きるか 戦って全滅するか」

師団司令部に着いて、すぐ無線開始、分隊長から「福井、お前すぐ電報を打て」、ハッと思っ
て電鍵（けん）を握ったが手がふるえてしまった。どうにか相手方と連絡がついて少し落ち着いたようだった。これが、ホンモノの戦争の初めての体験である。軍刀を下げた中尉の将校



も、私のそばでふるえていた。「なんだこいつら職業軍人のくせに——」と思った。
二、三日は食欲もなかった。もともと食事といっても、毎日例の乾パンと牛の缶詰ばかりだった。
そのうち、生えてきたひげ面をなで回す余裕も出てきた。命をさらすような危険な生活にも慣れてくると不思議なもので、見えないはずの大砲の弾も、音を聞いて見えるようになってき

た。飛んできた弾が、前に落ちるか後ろに落ちるかが分かるのだ。

砂地に「タコ壺」と呼ばれる穴を掘り、そこに身を隠しているが、夜になると、敵よりも蚊の襲撃に悩まされた。

ソ連側の兵力は圧倒的で、戦車や火砲の力では問題にならなかった。日本軍は、毎晩のように夜襲をかけるが、それしか戦う方法がなかったようだ。われわれにも、戦況が悪くなっている

ることがよくわかった。師団司令部も次第に後退を始めたが、軍隊では後退とは言わずに「陣地変換」と言う。前線では全滅か、全滅に近い状態の部隊が続出していった。兵力の差が余りにも大き過ぎたのだ。
初めは優勢に見えた飛行機の数も、終わりのころになるともう対抗出来なかった。我々の通信所も電報を打つ度に移動した。敵の方向探知機で居場所が分かってしまうので、逃げるように

移動しなければならなかった。一兵卒の悲しさで、戦況がどうなっているのかさっぱり分らない。私の髭も新兵には見えなくなつて、給水や食糧の受領にも、ほかの兵隊より図太くなつて随分と得をしたようだ。古

参兵らしい貫禄もついてきた。知らない初年兵に敬礼をされたりして、戦場慣れもしてきたのだらう。人間、開き直ると自信がつく。明日無き命を思えば、なにかしら自然に悟ることがあるものだ。

敵は、決まった時間になると攻撃をし掛けてくるし、十二時になると、一時休憩になる。次に、何となく身の危険が分かるようになるものだ。「そろそろ弾が飛んでくるぞ」と思っていると必ずやつて来るし、「そろそろもうひと休みだ」と思えばびたりと止む。

それにしてもこのノモンハン一帯の砂丘地帯は、木も無く草も満足に生えてない。昼はクソ熱くて、夜は寒いくる。何で越境だの何だのと争うのか、まったく分からない。



(※ 次ページからの続き)

日本の飛行機も二、三機あつたようだが、日中、警戒に飛行機を隠した。何しろ空襲になると何十機も飛んでくるので、あれでは戦にならない。飛行場の回りに板で飛行機の形を作つて並べておいたが、それにも爆弾が落とされていた。

本部は、カシワバラという所にあつた。作業が終わると監督から、「オイ、若松！」と声がかかる。本部へ呼ばれて、エライ人たちの前で歌をうたつてくる。すると帰りにはお菓子なんかをくれる。それを飯場に帰つてから仲間に分けてやるもんだから、みんなに喜ばれた。

わしらの飯は大豆粕とこんぶの混ぜ飯で、米は二割ぐらいだった。本部に行くと、米俵が山に積んであつた。月に一回、菓子と茶飲み茶わん一杯の酒が出た。「天皇陛下からのご下賜である。」といわれ、最敬礼をしてからいただいた。いろいろな人間が集まっていたが、食うことと女の子の話、バクチをやるぐらいがその日の楽しみみたいなんだった。(つづく)

随筆

古平——八

漁港ものがたり

古平 川 義雄



役場の建物以外には、コンクリートで造ったものが無かった古平に、巨大なケーソンが次々と造られ、梁台を滑って豪快なしぶきをあげては進水した。

昭和の初めころ、子どもの私はそれを見に駆けつけ目を見張って驚嘆していた。築港は次第に伸びていったが、想像していた沖村の方向どころか、みるみるうちに陸岸に曲がりだし、これで終わりの印に鉄骨の櫓が組みまれ、それが灯台となってチョンとなってしまった。

しかし、新しい釣り場のできた子どもたちは大喜びで、私と新場の哲ちゃんも毎日のように築港に出かけた。そうしている時でも、チャチな築港の悪口を私が言うのと、数か統の建網漁場を経営している種田家の御曹子らしく、「沖に（築港を）出せば鯨が獲れなくなるそうだと申し訳なさそうに弁解した。」

それから数年後、築港とは無関係に鯨は来なくなり、親方衆も没落していった。

それまで邪魔モノ扱いされていたスケソウに、にわか活路を見つけた新興の親方たちの二十トン未満船が、焼玉エンジンの音を勇ましく響かせて増え続け、港はたちまち狭くなってしまう。

年配組は善宝寺参り、新鋭の若手たちはナイロン網や、魚探

古平町挺身隊員として北千島へ

——世は身を助く——

若石 松 定 衛 (談)

若いもんは兵隊にとられ、働き手がなくなり、それで軍部では、役場に人数を割り当てて働ける人を集めた。役場ではそれを町内会に割り当てた。誰かが

の新装備をして大漁を重ねた。この積丹の沖に延びる百尋線

に高島・忍路・余市・美国の漁船の大群が網を入れ、中層のスケソウはこれまた延縄船団が魚探を使つて的確に釣り上げた。

どんな魚だつて無限にそこにいるわけではないから、起死回生になつたスケソウ漁もすでに先は見えていた。

昭和四十年代、古平の漁師はその底力を十分に見せつける遠洋漁業に転じた。九十六トン型で四十数隻、さらに二百トンを超える大船でさえ十数隻を数えた。レーダー、無線、魚探、冷凍設備をそなえた大船が母港古平の箱庭みみたくに狭苦しくなつた港にい（蝟）集した。

港はまた、慌てたように沖に向かつて延ばされた。

昔から濫獲好きな日本漁船を被害国が黙って見過ごすはずがない。領海二百カイリどころかさまざまな理由をつけ、公海までも規制して日本の船団を締め出した。遠洋漁業時代も終わった。

ほそぼそと前浜漁を続ける舟と、ガヤまでも規制をうける遊漁船しか基地にしくなつた港は、グニャグニャと曲がつてはいるが、それなりに古平の漁業史を物語っているようだ。

今は、長年の連れ合いを失つた人の、独り寝のダブルベットのように侘しく広い。

千人ぐらゐも集まつていて、昼夜交替で飛行場の建設をした。

日中は、朝の六時から日没までが作業時間。夜も暗い中で作業してたが、夜になると毎晩のように空襲があり、照明弾を落しては建設中の飛行場を爆撃する。昼に仕事をさせておいて夜になると壊しに来る。敵もなかなか頭がいいもんだ。
(※ 前ページ三段目へ続く)

鯨の群来を待つ浜

池田 テル

深い雪の中で立春を迎えるこの町では、このあといつそう吹雪く日が続きます。まだランブのころは、リンゴの木がたくさんありましたから、春を待つ間の冬の日には、たいていの家ではリンゴの袋張りをします。暖かく燃える囲炉裏のそばで、鯨場のことなど語りながら、家中で仕事をします。そんな時、窓を打つ吹雪と共に、煙り出しの窓から逆に風が入り、囲炉裏のたき火が消えて部屋の中は煙でいっぱいになり、けむったいで隣の部屋へ逃げて行きます。小さい妹を抱いて奥の間へ行つた、祖母の子守歌が聞こえてきます。

「ごめ、ごめ、ごっこめ、いつ鯨とれるー あしたの晩げとれるー こうりゃ、こうりゃ、こうりゃー」
春が近くなり、子どもを寝かせる時になると、祖母はいつもこの歌をうたっていました。

雪にねむる町呼びさまし
海猫の群れ
空暗らめ来りき
鯨を告げて

空が晴れ明るくなって来たので、私は嬉しくなって外へ出ました。その時上空に妙なざわめきが起こり、一瞬空が暗くなりました。私は恐ろしくなって家へ駆け込みました。見るとそれは、低く飛来して来たごめの大群だったのです。その光景は、

（△7日はこしんな日）

昭和十七年に『金属回収令』 学生服の金ボタン・釣鐘を供出

戦争が激しくなるにつれて、軍需物資としての金属が足りなくなってきた。

昭和十九年には、とうとう学生服についている金ボタンまでが回収され、代わりに木で出来

私の生涯の強烈な思い出となっています。

「鯨が来るぞー」
と、町は活気づきます。

畑の方からも馬橋の鈴の音が響いて来て、網や家具を積んで浜の方へ行きます。鯨場の準備です。私の家でも、浜の粗末な家へ引越します。私は久しぶりの海が嬉しくて、まだ冷たい風の中を、ようやく歩き始めた妹を連れ出し、浜の砂利に座って海を眺めていたら、探しに来た母にひどく叱られました。

浜には鯨を獲るサンパがたくさん並んでいます。父はときどき浜へ立っては、海の様子を眺めていました。

ようだ。着られなくなった学生服からはずしたり、予備に買っておいたものを集めた程度ではないかと思われる。

実はこれより二年前、『金属回収令』がすでに発動されていて、「お寺の仏具や梵鐘など」の強制供出が命じられていたのである。

金属ボタンまでが供出させられたころ、禅源寺や宝海寺の釣鐘も強制的に供出させられた。しかし、禅源寺の釣鐘はその後荷揚げに長く放置されたままになっていて、それを見た岳転和尚は、「ああもつたいたい。檀家の人に申し訳がない。」と言っていたという。また、宝海寺の釣り鐘は、終戦後、函館にあったのを見た人がいて、そのことを現・住職さんに話していたそうである。

もちろん一般家庭にも、「積極的に供出してほしいもの」として、門柱・扉・広告板・手すり・欄干など、「自発的に供出してほしいもの」として、バケツ・置物・菓子器・傘立て・鈴蘭灯などが挙げられていた。

